

日本白鳥の会会長 松 井 繁

昨年9月に家田会長御勇退の後をうけて、皆さんの御推薦を受け、会長を拝命した。微力ではあるが、御協力を得て、任務を果たしたいものと考えている次第である。

家田会長は会の創設、そして運営に御尽力下され、また会の創設時の目的の一つであった第二回国際白鳥シンポジウムの招へいに努力され、昭和55年にIWRBの代表者会議と白鳥、鶴の国際シンポジウムが開催されたことは既に御承知の通りである。なおこれらのこともあって、本年5月に日本鳥類保護連盟の総裁賞を受賞されたのは、本会としてもまことに名誉なことであり、心からお祝い申し上げるものである。

近頃ラムサール条約について時折マスコミがとり上げているが、このラムサール条約の批准、IWRBへの早期加盟を環境庁に最初に陳情したのは日本白鳥の会である。昭和51年11月6日に副会長の三上先生、本田事務局長と私が時の環境庁長官丸茂重三郎先生に陳情書を提出し、昭和52年にはIWRBのマッシュズ会長を迎えて、IWRBの日本委員会が設立された。この会が中心になり、国際会議が開催されたのは前述の通りである。私がここにあって昔のことを述べたのは、最近入会された方々に私どもの白鳥の会がただ白鳥の保護にのみ終始してきたのではなく、水鳥全般の保護行政に貢献していることを知って頂きたかったからである。

ところで、会が発足してから来年で満10年になる。発会当時若かった方々も少なからず年をとって(?)、給餌、その他の保護活動に疲れを覚えるようになってきた。北海道の屈斜路湖の川村さんは自分の後は誰が給餌をしてくれるだろうかと悩んでおられる。青森の畠山さんも両膝の病気で活動が思うにまかせないと嘆かれ、大森副会長も腰、膝の痛みで、すでに給餌作業から退かれた。10年という歳月が幾人かの人を保護の第一線から退かせようとしている。次の世代をとという声は昨年の総会の折から持ち上がっていたが、今年になってその声が切実なものになってきた。私どもの総力を結集してこれからの人たちを育て上げて行きたいものである。

私自身この1、2年は一身上の都合で会務に打ちこめなかったこともあるが、一昨年の国際白鳥シンポジウムの後、大きな仕事が終わったという安心感からか、この会が今一つ盛り上がりを欠いた観がある。定時定点観察のとりまとめをしている玉田理事から、データーの集まりが悪いと再三指摘されているのもその一つの現われである。定時定点観察は第一回の設立総会でとり上げられ、以来欠かさず行われているが、最近データーに穴があくことが屢々であり、総会の度に討議されている。このことに関連して、山内さんからここ数年5千~6千羽のコハクチョウがクッチャロ湖に渡来しているのに、環境庁の一月の調査、会の定時定点観察でも数をはるかに少い、と異議が出されていた。それ故、昨年の島根例会が中止になった際に、急きょクッチャロ湖のコハクチョウを見る例会を浜頓別で開いたのであるが、運が悪いことにコハクチョウが遠くて納得が行かなかった方もいたことと思う。けれども今年の環境庁の調査ではコハクチョウは5千羽を超えたのである。今年の総会ではこの環境庁の調査に対して狩猟の会だけに頼らずに野鳥の会、わが会を含めた調査をとという案もでた。私も私的に環境庁の鳥獣保護課の上層部の方と話しをしたが、仲々スムーズには行かないようである。繰り返し述べるが定時定点観察のデーターは貴重なものである。定時、定点という趣旨をふまえて、更に続けて行くのが、私どもの大切な任務である。

終りにこの文を書いている時、酒田の阿部会員の突然の訃報が11月2日に入った。創設以来理事として活躍されたことに深く感謝すると共に、故人の御冥福を心からお祈りする次第である。